

高橋誠一郎 著

『欧化と国粹—日露の「文明開化」とドストエフスキー—』

刀水書房 2002年

木下 直俊

2001年9月11日の同時多発テロ以降世相は悪化の一途を辿り、瀋陽事件、北朝鮮による拉致問題、そしてはイラク戦争と、日本の前には険路が続いてきた。これらの問題に対して、今、日本政府は「国家」としての対応を次々と迫られている。国際社会の中で主権国家としての責任を果たすことが求められているというものである。そのような状況の中で日本は「有事三法」を成立させ、愛国心や伝統を重要なものとして、高揚させようとしている。「国粹」の流れを強めている感がある。

一方、日本の同盟国であり、様々な分野で他を凌駕する超大国アメリカ合衆国は、「グローバルイゼーション」の名のもとに自国を核とする「単極構造」をますます強めている。「これに対する反発からか「ローカリゼーション」が強いナショナリズムを伴いながら、世界の各地で野火のような広がりを見せている」(24頁)。

時代は侵略と破壊の軌跡を残しながら、混沌とした未来に向かいつつあるようだ。

本書はロシア、日本で19世紀半ばに生じた近代化＝「文明開化」に焦点を当て、これを比較文明論的視点から考察しようとするものである。ドストエフスキー、福沢諭吉、夏目漱石などの文学作品を軸とし、その他多数の文学作品を分析することにより、当時彼らの持っていた文明観を明らかにすることを意図している。さらに近代化の中で「排外」(＝「欧化」)と「排外」(＝「国粹」)といった対峙する思想に揺れ動く日本とロシアを明瞭に描き出していると言える。現在も「欧化」と「国粹」で揺れる周辺文明国として日本を捉えることで、これに対して提言を行おうとしている。

本書の構成は次の六章からなる。

序 章 二つの文明観—福沢諭吉の文明観とドストエフスキー

第一章 日本の開国とクリミア戦争—「欧化と国粹」の視点から

第二章 「大改革」の時代と「大地主義」—雑誌『時代』と世代間の対立

第三章 権力と強制の批判—『死の家の記録』と「非凡人の思想」

第四章 虚構としての「国民国家」史—『冬に記す夏の印象』と日本

終 章 「欧化と国粹」のサイクルの克服—夏目漱石の文明観とドストエフスキー

以下、内容を紹介していきたい。

1862年ロンドン郊外で開催された万国博覧会に福沢諭吉(1835~1901)とドストエフスキー(1821~81)は、時を同じく訪れていた。万国博に対する二人の反応の相違は実に興味深い。福

沢諭吉は西欧の最新科学技術に触れ、日本の遅れを痛感した。ロンドンの繁栄を目の当たりにし、日本の近代化、文明化には近代西欧文明の受容が不可欠だと強く感じたのである。ここで福沢は近代西欧文明の「陽」の部分に肯定的な目を向けたと言える。これに対してドストエフスキーは、近代西欧文明に伴う「陰」の部分に注目した。実際当時ロンドンには「貧民窟での売春婦、「事実」に押しひしがれ」「麻痺状態」におちいつている労働者たち」(183頁)であふれていた。ドストエフスキーは科学の粋を集め鉄とガラスで出来た水晶宮とよばれる展示館を見て万国博の盛況を認めつつも、むしろ「全世界から集まったこれら無数の人間すべてをここで一つの群に集めた恐るべき力」(146頁)を見て取った。このような見方は「水晶宮は、訪れた人々に商品が氾濫する豊かな世界を感覚させたが」、同時に「人々の身体を欲望のメカニズムのなかへと接続させていったのである」(146頁、『博覧会の政治学』1992年)とした吉見俊哉の見解に先立っていたのである。

福沢諭吉とドストエフスキーの文明観は対照的である。二人の文明観を大きく隔てた要因は、日本とロシアにおける歴史的背景の差にある。長い鎖国の後、西欧文明と接した日本とは異なり、ギリシャ正教を受け入れたロシアは西欧と宗教的、政治的な摩擦や戦争を幾度も経験していた。さらにピョートル一世(1672~1725)治下のもと日本より約150年も前に「文明開化」が行われていたという事実であった。しかし、急速な近代化は、一部の貴族たちが富を握り、農民や町人は「農奴」と呼ばれるような悲惨な状況を強いられる、といった社会をもたらした。そのようなロシアの状況を知った福沢諭吉は、ピョートル一世の改革を高く評価する一方、独裁的な専制政治体制を批判した。福沢諭吉は独裁的な政体をロシア独特の弊害と見なしていたが、それは西欧諸国よりも遅れて近代化に着手したことによる、急速な近代化がもたらした弊害でもあった。

ロシアでは、トルコとの間で勃発したクリミア戦争(1853-56)が当初ロシア軍優勢で進められた。しかし、トルコが屈服するのを恐れたイギリス、フランスなどがトルコ側に参戦すると、形勢は逆転し敗北した。一方、日本では1853年6月アメリカのペルー提督が4隻の艦隊を率いて浦賀に開国を求めてきた。日本、ロシア両国ともに近代西欧文明の圧力の前に、近代化の必要性を痛感させられたのであった。

クリミア戦争で負けたロシアは、アレクサンドル二世(1818-81)の治政のもとで新しい科学技術、経済思想を進んで取り入れた一連の近代化政策の着手し、農奴解放、司法制度、教育制度、地方行政制度、経済政策などの「大改革」を行ったのである。一方、日本もまた近代化を急いだ。こうした状況下で、幕府は開国の交渉と視察のために福沢諭吉などの使節団をフランス、イギリス、オランダ、ロシアなどの西欧諸国に派遣した。1863年の初めにヨーロッパの視察と各国との交渉を終えて帰国した福沢諭吉は、日本の独立を守るためには、西欧文明の早急な受容とともに、より中央集権的な政府が必要だと感じるようになっていった。このように、ロシアと日本はともに、近代西欧文明からの外圧を契機に近代化を行っていったという共通点が見出だせる。

しかし、外圧を契機とする近代化は「排外」と「排外」といった対立する思潮を生み出すこととなる。つまり、西欧のように内圧によって近代化を果たしたのではなく、西欧の圧力によ

り半ば強制的に近代化した「周辺文明国」と位置づけられた日本とロシアは、絶えず西欧の力の影響下におかれる。そのような状況は西欧を理想型として位置づけ、これに極力近づこうとする傾向を生み出す。しかし、その反面、自国に対する劣等感を生じさせ、それを補おうとするかのごとく、ねじれた優越感を生み出す傾向も、同時に生じさせたのであった。その好例が、ロシアにおける、「西欧化をはかることによって社会的な遅れを改革しようとする西欧派と、過去を見直すことによりロシア独自のよさを見出そうとするスラヴ派」(53頁)の対立である。そこで、ドストエフスキーはその対立に対し、雑誌『時代』の中で、次のように見解を示しているところに高橋氏は注目している。「自分たちの使命は「われわれの土壌から採られた、国民精神の中から、そして国民的源泉から採られた形式を創り出すことである」としてスラヴ派的な原理を認めるとともに、西欧の理念が果たした役割にも注意を払って、それは「あのようにねばり強く、あのような勇気をもってヨーロッパがその個々の民族において発展させている諸思想のジンテーゼとなるかも知れない」と記して、スラヴ派と西欧派の対立を乗り越える第三の道として「大地主義」の理念を標榜していることである」(75頁)と高橋氏は述べている。

福沢諭吉とドストエフスキーの対照的な文明観を紹介するとともに、高橋氏は、終章において、夏目漱石(1867~1916)の文明観についても触れている。夏目漱石は1900年にロンドンを訪れていたが、近代西欧文明の繁栄よりも近代西欧文明の「陰」の部分に目を向けることとなった。これはドストエフスキーに近い認識である。つまり、「福沢諭吉の38年後についた夏目漱石は日本の急速な「文明開化」の結果、ドストエフスキーが見た近代西欧文明の否定的側面をも観察できるだけの地点にいたといえる。それは「文明開化」の第一世代ともいえる福沢諭吉と、「開化」の様子を見ながら育った第二世代ともいえる夏目漱石の違いともいえるだろう」(184頁)と高橋氏は考察している。

明治維新後、日本は「欧化」の流れに危機感を強め、政府は「神道」を国教として宗教の面から国民意識を統合しようとする。そして「富国強兵」を目指し「徴兵制」「教育勅語」が發布され、時を追うごとに「国粹」を強めていく。急激な「文明開化」を契機として、日露戦争勝利後、日本では「欧化」に対抗する「排外」の極端な反動がおき、自国の特殊な「伝統」が強調される一方で、西欧からの思想は「普遍性」をもったものをも排除するという精神的な「鎖国」状態となり、無謀な戦争への道をひた走ることになったのである。

幕末から明治時代中期までの急速な「欧化」に対し、1870年代に反動の動きとして「国粹」が進展した。日露戦争勝利後の大正時代には大衆レベルにまで「欧化」が浸透するが、昭和初期にはファシズムが台頭し、「国粹」が極端に強くなり、その結果太平洋戦争敗戦へと至ることとなる。戦後、その反動は再び「欧化」に傾くこととなった。幕末以後、絶えず「欧化」と「国粹」の循環が起こっている。山本新氏は『周辺文明論』の中で、日本では「欧化」と「国粹」の激しい振幅が、ほぼ20年周期で交代していることに注目している。いずれにせよ、幕末に始まった「欧化」と「国粹」の循環は未だなお脈々と続いているのである。戦後50年以上がたった現在、超大国アメリカ合衆国の強い圧力を受けて、現代の日本では、「欧化」ならぬ「米化」と「国粹」が同居する奇妙な状況が生じている。行き過ぎた「欧化」も「国粹」も未来を築くことは出来ない。高橋氏がドストエフスキーで著書を引用している「大地主義」に、

木下 直俊

これからの日本文明を再構築する可能性があるのかもしれない。

・追記

本著作を深く読み解く上で、山本新 著 『周辺文明論－欧化と土着』 神川正彦、吉澤五郎編、1985年、刀水書房が有用である。

*なお本文中の（ ）内は本著作の頁数を示す。